氏　　名：髙　橋　智　子
学 位 の 種 類：博士（看護学）
報　告　番　号：甲 第 ８ ０ 号
学 位 記 番 号：博 第 ８ ０ 号
学位授与年月日：平成３１年　３月１３日
学位授与の要件：学位規則第４条第１項該当
論　文　題　目：急性期看護における日常生活ケアモデルの構築
Development of a Daily Living Care Model in Acute Nursing
論 文 審 査 員：主査　筒　井　真優美
副査　高　田　早　苗（正研究指導教員）
副査　本　庄　恵　子（副研究指導教員）
副査　川　嶋　みどり
副査　川　原　由佳里

論 文 内 容 の 要 旨

Ⅰ．研究の背景・目的

看護は生活行動に着目し、日常生活ケアを通して人々の生命と健康に貢献することを独自の氏名としてきた。日本では、日常生活ケアは保健師助産師看護師法に看護の二大業務の一つである「療養上の世話」に位置付けられ、看護（職）の専門性として独自的判断による実施が重要視されてきた。近年、医療技術の高度化や効率化が進み、また患者の高齢化などにより、健康問題も重症化かつ複雑化している。急性期看護にはこれまで以上に診療の補助の役割を果たしつつ、個々の患者の状況に応じたより専門性の高い日常生活ケアの実施が求められている。しかしながら。このような急性期看護の現状をふまえ、日常生活ケアの実践を明らかにした研究は少なく、実践の効果は十分に示されていない。

研究目的は、急性期看護における日常生活ケアモデルを構築することである。理論的な検討を通して日常生活ケアの概念を明確にし、実践事例とその分析を統合して急性期看護における日常生活ケアとその効果を説明するモデルを構築する。

急性期看護における日常生活ケアの実践場面を統合することによって経験的基盤を得ている日常生活ケアモデルは、看護師の実践を導くモデルとして活用されうる。このモデルが看護師に活用されることを通じて、個々の患者の生活を尊重し、健康の回復をもたらすケアの提供につながる。効率化や機能分化の進行に伴うケアの断片化等が懸念される最近の急性期医療環境に、看護における日常生活ケアの専門性と価値を示すものとなる。

Ⅱ．研究方法

本研究におけるモデル構築の方法は Walker & Avant（2014）の理論統合および Schwartz-Barcott & Kim（1986; 2000）が概念分析の方法として提唱する、Hybrid Model を参考に、理論の相、フィールドワークの相、統合の相の 3 つの相で構成した。

1. 理論の相：日常生活ケアに関する文献検討および実践経験、専門家の意見をもとに日常生活ケアの初期モデルを作成し、図式化した。
2. フィールドワークの相：初期モデルの経験的基盤を得る目的で、2 急性期病院でフィールドワークを行った。参加者は急性期看護経験が 5 年以上の看護師 9 名であり、参加観察とインタビューを通してデータを収集した。2017 年 5 月～2018 年 3 月。得られた日常生活ケア場面は、食事援助、歩行援助、清潔ケアなどの 25 場面。急性期にある患者の状況、看護師のかかわりやその意図、患者の反応や効果を抽出してカテゴリ化した。
3. 統合の相：理論の相およびフィールドワークの相の結果を統合させ、初期モデルを精緻化し、日常生活ケアモデルを作成した。

研究は日本赤十字看護大学研究倫理審査委員会の承認（予備研究承認番号 2016-105、本研究承認番号 2017-056）および対象施設の研究倫理審査会の承認（承認番号 201722）、承諾を得た研究系活に沿って実施した。

Ⅲ. 研究結果

1. **理論の相**：急性期にある患者の「生活」を統合的に捉えて実践する日常生活ケアの初期モデルを「生命活動」・「生活行動」・「暮らし」の 3 つの概念で構成される重層構造で示した。3 概念は、看護師が急性期にある患者の「生活」を捉える視点を示し、生命活動の安定化や活性化を図るケアは機能の維持を、生活行動を支えるケアはその人の能力に応じた自立と依存のバランスの維持を、暮らしを見据えたケアはその人の生活の豊かさや多様性のある社会の実現を目標とすることとした。
2. **フィールドワークの相**：日常生活ケア 25 場面を分析した結果、急性期にある患者の状況を示す 5 カテゴリ、急性期看護における日常生活ケアの具体的方法を示す 8 カテゴリ、日常生活ケアがもたらす患者の反応や効果を示す 5 カテゴリが見出された。

看護師が捉えた患者の状況である**〈急性期にある患者の状況〉は、**〈心身が不安定で変化しやすい〉〈自己のコントロールを失いやすい〉〈身体と気持ちがついていかず自身を気遣う余裕がない〉〈一進一退で先行きが見えない〉〈自分のこととして病気に向き合うようになる〉から構成された。

【急性期看護における日常生活ケアの具体的方法】は看護師が何に着目し、どのように日常生活ケアを実践しているのかを示したものあり、【心身の回復度合いを見て無理をさせない】【動かしながら心身の安定性を見て働きかけ具合を判断する】【身体的に厳しい状態であっても相談しながら段階を進める】【苦痛や制限に耐える心情を汲み、苦痛や不安を和らげる】【よくなっていることを言葉にして伝え、回復を実感できるように働きかける】【馴染みある行為をきっかけにして日常的な感覚や潜在的な力を引き出す】【自身でケアしていくことの大事さをメッセージにじませる】【患者という枠組みではなく、その人となりをつかんで像を描く】から構成された。

《急性期看護における日常生活ケアがもたらす反応や効果》は、日常生活ケアがもたらす患者の反応や効果であり、《回復状況に合わせた適切なタイミングで段階を進む》《日常的な感覚や動きが蘇り、人間らしさや自己を取り戻す》《苦痛からの解放や回復の実感により生き返った心地を味わう》《生活行動への意欲が引き立てられたり、自身を取り戻したりして活力が湧き出る》

《自分の状況を理解し自身に関心を向ける》から構成された。

3. **統合の相**：理論の相とフィールドワークの相を統合した結果、急性期看護における日常生活ケアを、「生命活動そのものが不安定あるいは安定しつつある患者に対し、（中略）、その人の全体性の回復に働きかけるアートである。このアートは、その人のもつ日常的な感覚や動きを蘇らせて人間らしさや自己を取り戻す（中略）、などその人の全体性の回復をもたらし、その人の暮らしの豊かさにまで波及する」と定義された。このモデルでは、フィールドワークで明らかになった**〈急性期にある患者の状況〉**は、看護師がその人の状況に応じたケアを生み出す文脈となる。**【急性期看護における日常生活ケアの具体的方法】**で看護師は熟練した技能を駆使してケアを創造し、それを通じて患者との関係性を築き、患者の回復にとって意味ある変化を生み出すなどの看護のアートの要素が含まれていることから、**【急性期看護における日常生活ケアのアート】**と命名した。**《急性期看護における日常生活ケアがもたらす反応や効果》**は、急性期看護における日常生活ケアの効果は、あるニードを満たされる、特定の生活行動の自立が達成されるというものだけではなく、その人の感覚や動きが蘇って表情が一変する、その日をやり過ごすことで精一杯であった人の活力が湧き上がるなど、全体としてのその人の回復が表現されていることから、**《その人の全体性の回復》**と命名した。

このモデルにおいて看護師は、「生命活動」・「生活行動」・「暮らし」という重層的視点のもと、**〈急性期にある患者の状況〉**を捉え、いくつかの**【急性期看護における日常生活ケアのアート】**を同時に組み合わせて、**《その人の全体性の回復》**を導くといったダイナミックな日常生活ケアを実践しているものとして構造化した。この重層構造と概念間の関連性について図式ならびに事例を用いて説明した。

Ⅳ．考察

本研究の結果、急性期看護における日常生活ケアモデルの特徴は 3 点にあると考える。
日常生活ケアを看護独自の役割とするこれまでの看護理論を継承発展させ、急性期看護領域における日常生活ケアの「how（どのように）」を示す中範囲理論を構築したことである。次に、急性期看護における日常生活ケアを重層的な視点で行うことにより、その効果は個々の生活行動に付随するニードの充足や自立にとどまらず、その人の全体としての回復をもたらすことを示すことで急性期看護における日常生活ケアの価値が確認された。最後に、今日の急性期医療の場における看護実践という経験的基盤に基づき、このモデルが構築された。これにより、あるべき理論ではなく実践での有用性を示せるモデルとなった。

本研究で提示した日常生活ケアモデルを理論として発展させるためには、実践の場におけるモデルの活用を検証し、その効果を評価することが課題である。

論文審査の結果の要旨

本研究は、急性期看護における日常生活ケアモデルを構築することである。理論的な検討を通して日常生活ケアの概念を明確にし、実践事例とその分析を統合して急性期看護における日常生活ケアとその効果を説明するモデルを構築するものである。

近年、医療技術の高度化や効率化が進み、また患者の高齢化などにより、健康問題も重症化かつ複雑化している。急性期看護にはこれまで以上に診療の補助の役割を果たしつつ、個々の患者の状況に応じたより専門性の高い日常生活ケアの実施が求められている。そのなかで、本研究は急性期看護領域における看護の日常生活ケアの理論化という学術的なチャレンジを行ったものとして高く評価された。

また本研究は、単に理論モデルの構築ではなく、実践の場での看護実践を導き評価するために活用できる実践家に役立つことをめざし、そのために理論構築に関する研究方法を入念に検討準備し、構築した理論モデルを、看護実践場面のフィールドデータの分析結果と統合するという丹念なプロセスを経たことが評価された。

これにより急性期看護領域における日常生活ケアが、生命活動、生活行動、暮らしという重層的視点のもとに行われていること、日常生活ケアはアートとも表現することが可能な専門的なスキルによって実施されていること、またケアを通じて看護師がその人の全体性に働きかけて回復という現象をもたらしていることを鮮やかに描き出している。これら実践の豊かさを反映した新たなモデルの構築は、そのまま看護独自の役割を明確に伝えるものであり、看護学にとっても重要な知見であると評価された。

本研究で提示された日常生活ケアモデルは、今後実践の場における活用、その効果の評価を通じてさらに開発されることが十分に期待できるものである。

審査の結果、本論文は本学の審査基準を満たしていると判断し、博士（看護学）の学位論文として「合格」と判断した。